

# 『アラベラ・スチュワート』フェリシア・ヘマンズ作

——詩と解説——

“Arabella Stuart” by Felicia Hemans: Translation.

滝 口 智 子

Takiguchi, Tomoko

## ABSTRACT

“Arabella Stuart” is the first poem in *Records of Woman* by Felicia Hemans. Setting her stories in several countries and in a variety of time periods, Hemans in this collection of poems adapts popular historical and legendary tales for her own purposes, and presents her protagonists as sufferers involved in the imperial and colonial project. Many of the heroines resist the imperial oppression of which they are victims. Their resistance toward authorities serves as a secret metaphor for the alienation and yearnings for liberation women feel in a society. Here I translate “Arabella Stuart” into Japanese as an example of the way this metaphor functions.

イギリスの後期ロマン派詩人フェリシア・ヘマンズ (Felicia Drothea Hemans, 1793–1835) の代表作『女性の記録』(*Records of Woman* 1828) は、苦しむ女性を主人公とする十九編を集めた詩集である。この作品が書かれたのはウィーン会議後のヨーロッパにおいて、各地で自由主義とナショナリズムの運動が起こっては弾圧される反動的な時代だった。そうした時代を反映して、作品には様々な国と時代の実話や伝説に基づき、戦争や帝国の植民支配に傷ついて命を落とす人びとが描かれている。主人公たちの多くは帝国の圧政の犠牲者であり、同時に圧政に対する反抗者である。このような権力へのレジスタンスは『女性の記録』において、社会の中で女性が抱く孤独や疎外感と自由への希求の、隠れた

メタファーになっている。

ここに翻訳した巻頭詩『アラベラ・スチュワート』(“Arabella Stuart”)は、スチュワート王家の一員でありながらジェームズ一世に反抗して獄死した女性の実話を元に創作された。作品中には直接的な帝国への言及はない。しかし詩の創作時にヨーロッパの反動的な政策に同調していたイギリスが、王権神授説を唱えて専制政治を行ったジェームズ一世の姿と重ね合わされていると言えるかもしれない。幽閉されて劇的独白という形式で心情を吐露する主人公は、終始受動的に嘆いているだけではない。大胆に王家を批判し、妻を見捨てる夫への怒りを爆発させ、さらには自身の死を宗教的に高めていく。その過程には、女性が自ら声を上げて抑圧から自由を勝ち取ろうとする意志が反映されている。

『女性の記録』における主人公たちの抵抗と批判は、『アラベラ・スチュワート』にも見えるように、彼女たちの家庭的な愛情、敬虔な身振りという様々な「女性らしさ」のレトリックによって最終的にはかなり弱められる。しかしヘマンズに彼女の描く女性たちに抵抗を貫かせることへのためらいがあったことで、彼女の詩は当時の多くの読者にとってむしろ受け入れやすいものになっていたのかもしれない。

ヘマンズは生前から名声を確立しており、その作品はヴィクトリア時代に人気のピークを迎えた。彼女の描く、夫や息子たちを戦争に送り出し彼らを英雄視する妻や母の姿は、「ヴィクトリア朝の家庭的愛国主義」を予期していた（なかば形成した）、と指摘されていることを付記しておく。

翻訳の原詩として *Felicia Hemans: Selected Poems, Letters, Reception Materials*, Ed. Susan J. Wolfson (New Jersey: Princeton UP, 2000), pp.331-339 におけるテキストを使用した。ヘマンズの『女性の記録』について、筆者は「批判する犠牲者としての女性—フェリシア・ヘマンズの『女性の記録』」(『北海道英語英文学』第47号 2002年, 73-82頁)において論じた。

## 『アラベラ・スチュワート』

(プロローグ)

「レイディ・アラベラ」はヘンリー七世の長女マーガレットの子孫にあたり、エリザベスやジェームズ一世とごく近い血縁関係にあった。王位に近いために親族の妬みをかい、不運な人生を歩んだ女性である。幸せな家庭生活を心から夢見ていたにもかかわらず、結婚を阻まれた。ボーシャン卿の息子であるウィリアム・シーモアと秘密裏に結婚したがすぐに露見し、ジェームズ王の臣下によって二人は別々に幽閉された。この間、二人は何とか脱出の方法を探る。アラベラはつらい幽閉生活のために衰弱していたが、侍女の手助けによって男装し、闇にまぎれてひそかに抜け出した。約束の場所に到着すると、侍従が用意していた小船で海へ漕ぎ出した。夜明け頃、救出のフランス船に無事に乗り込んだが、シーモアの到着はまだである。アラベラは船の錨を下ろして待つことを提案するが、侍従らはその願いを聞き入れずに帆を揚げてしまった。このとき、ディズレイリによれば、「アラベラのロマンティックな冒険は完全に終わりを告げた」という。「かたや、シーモアもロンドン塔から抜け出していた。波止場で待っていた側近とともに小船に乗ってリーに到達し、なかなか到着しないアラベラを待っていた。波も高くなってきたとき、遠くに船影を見つけたので、漁船に声をかけてそこまで乗り付けたが、それは妻の乗ったフランス船ではなかった。絶望し混乱したシーモアは、ニューキャッスルからの別の船を見つけて乗り込んだものの、その船は方向のまったく違うフランドルへ進んでしまった。」その間アラベラは侍従と共に夫の乗る船を捜し続けるうちに、カレー湾で王の差し向けた船に追いつかれ、再び囚われの身となった。この幽閉の苦しみで、アラベラは心身ともに衰えていったという。―「この恐ろしい幽閉中に何が起こっていたのか、真相はわからない。しかし彼女の精神が次第に蝕まれ、とうとう理性が失われて死に至ったことは確かだ。幽閉が短くて済んだのは、早すぎる死を迎えたからに過ぎない。何度も書いては消され、途切れ途切れに書きつけた

心の叫びだけが、彼女の日記に残されている。」—ディズレイリ著、『世にも珍しい物語』一。次の詩は、その揺れ動く思考と気持ちを想像しつつ、アラベラの運命を記録したもので、まだ彼女がシーモアの愛情を信じ、やがて救出されるとの望みを抱いていた最初の幽閉の場面から始まっている。

## I

夢だったのね！一朝早く小鳥のさえずる樹の下で、  
    牡鹿がのびのびと駆け回るのを見たのは。  
そこは王の森、エニシダの木陰に佇んでいると、  
    彼方から突然角笛が鳴り響くのが  
聞こえた。そのとき草原にいた仔鹿が  
きらめく光のように、ほの暗い茂みに駆け込んだ。  
草がしなやかに揺れ、寂しい谷間で百合が震え、  
若葉が揺らめいた—豪華な仮面劇のように、  
角笛と槍を手にした王子の一隊が、獵犬を連れて勢いよく  
駆け抜けていく。兜の羽根飾りを揺らして、銀色に光る  
一隊が森の奥へ消えていくのを見送った私。  
ただ一人そこに残った人—瞳を喜びに輝かせて、  
私に微笑みかける人は—ああ、それはあなた、  
シーモア！馬にまたがり、そよ風に髪をなびかせ、  
晴れ晴れとした表情で、きらびやかな一隊を離れ、  
槍を投げ捨てるそぶりを見せて、緑衣に身を包んだ  
あなたが、軽やかに私のもとへ駆け寄ってくる。  
強大な力に監視され、絶えず怯えながら  
出会い、別れた私たちは、子供時代のまっすぐな信頼を  
取り戻し、恐れることなく、薄暗い木陰で  
ひそやかな森の花々の香りに包まれて、小川が交わるように

喜びいっぱい気持ち伝えあった。

## II

夢は過ぎ去った！一目覚めれば

私は一人ぼっちの囚われ人、愛するお友達よ！

あなたからも遠く離れて。でもあなたがいるから、

希望のともし火を絶やしはしない。

深い信仰に支えられ、女性としての魂の力強さを

感じているから、苦境にあっても天を見上げることができる。

私にはわかるの、二人の愛は決して消えない

情熱で、空の天使をも招き寄せるはず。

早春のそよ風のように、命の息吹を

感じさせてくれるでしょう。瞳を希望に輝かせ、

喜びの涙を流して、苦しみのしるしを

消し去ってくれるでしょう。こう信じるから、

耐え抜き、戦います、決して屈服しません、

あなたに会ったときに、嵐に遭って立ち枯れた心、

生気を失った姿を、お見せしたくないから。

若い頃のままで再会し、過去の悲しみを

甘い思い出に変えたいのです。

## III

あなたもまた、囚われの身！一でも元気を出して、

愛しい人よ！一この世に絶望があるとしても、

私たちには未だ無縁だから。愛しい者の姿が

地上から消えてしまったので、笑い声も

晴れがましい光景も厭わしくなるとき、

それこそが絶望というにふさわしい、死者のそばで  
うなだれる者の悲しみこそが。もしもあなたがこの世を去り、  
そのお顔を見ることがかなわなくなれば—  
私の心に今も聞こえているあなたの  
深く響く声、優しい低い声が  
永遠にこの世から消えてしまったら—ああ！  
そんなことがあれば、耐えられない！—あなたは今  
確かに生きている、あなたは私のもの！  
この思いに支えられて、私はこの心を神殿として、  
一晩中明かりを灯し、夜が明けるまで  
じっと一人待ち続けている。

## IV

ほら！夜明けと共に喜びの一日が始まる、  
勝利を治めたのだ、不安でいっぱい時間に！  
暗くささやく絶望の声に耳を閉ざして、  
待ち続けたのは無駄ではなかった！  
あなたからの便りはまるで天国からのよう。—あなたの  
もとへ走るため、合図を待つ私。  
ああ！連れ合いを求めて流れ星のように飛ぶ  
雲雀の翼が欲しい！—でももうすぐ会える、  
海を渡る風の中で。—なんて待ち遠しい！  
あまりの至福に耐え切れず、気を失って  
しまわないかしら、強い日差しにくちづけされて  
萎れてゆく花のように？たとえ死が  
待っているとしても、恐れはしない—長い苦しみの後、  
やっとあなたの胸に抱かれて、完全な休息を、

深い喜びを得られるのだから。死の別れが悲しくても、  
愛する人のそばで、心豊かに安らかな終焉を迎えられるのだから。

## V

日没！一時が刻一刻と過ぎてゆく—王家の旗のように

壁に照り映える、夕暮れの

光！—今それがかすかになり、消えてゆく！

星が一つ見える—あの音は一いいえ、

私を呼ぶ声ではなかった。胸の鼓動が高まる。

あの月から降り注ぐ金色の光が消えるまで、

夜通し起きていなければ。格子窓から差し込む

月明かりのもと、遠い常夏の国を私は夢見ている。

絡み合う蔓や、シトロンの木陰で

愛の神が安らかに憩う国のことを。

夜は深まり、

空は静まり、あたりが眠りに包まれる。

鼓動の高まりを感じる。—ほら！鐘がゆっくりと鳴り響く。

鼓動がいつそう高まる。—もう一度—約束の時間だ！

足音！—声！—それとも激しい息遣いの音？

聞こえる！—急いで！—さあ行こう、海へ、あなたに会うために。

\* \* \* \* \*

## VI

ああ、もうおしまい！なんて悲しい愛、もう二度と、

無駄な願いなど持たないほうがいい—もう二度と！—私の

人生を照らしていた希望は粉々に砕け、優しい神託を

告げていた内なる声も止んでしまった。

太陽の光が届かないところに、遺骨のように横たえよう、  
私の青春を。一すべては失われた！  
私たちの船は、嵐に遭ったわけではない。一大波は来なかった。  
でも二艘は引き裂かれた、こんなに愛しあう二人なのに、  
こんなに必死に、迫り来る運命の渦から  
逃げようとしたのに！無駄だった一すべては！  
重い鎖の輪が再び結ばれて、留め金がかけられ、  
私たちの人生を押しつぶす。—私は甲板に立っていた、  
白い帆船が海鳥のようにさっそうと、海上を滑り、  
近づいてくる。私は目を凝らした。とうとう  
待望の船が来たと思い、待ち遠しくて  
しかたがなかった。それなのにやっと到着したのは、  
敵を乗せた船！—何の役に立つだろう、  
あの抵抗を、あの涙を思い出すことが？  
再び牢獄の壁に阻まれて、緑の丘も、森も、  
視界から消えてしまった。きらめく海の水も、  
そしてあなた、シーモア、あなたまでも！

負けるものか！

あなた、あなたは身を縛る鎖から逃れた、  
それを私の力にしてみせる。—あなたが天からの  
風に吹かれ、青空の下を歩んでいると思えば  
嬉しい！この喜びこそ、私の心に光を照らし、  
絶望から守ってくれる、きらめくお守り。  
あなたの拘束は解けた。私は救出を待つ、救出こそ  
あなたからの真実の愛のあかし。それまでの日々が  
暗く、涙でかすんでいるとしても。



## VII

お友達よ、私のお友達よ！いったいどこにいるの？  
日々が過ぎ、悲しげな小川のように、私の青春が  
この手から滑り落ちてゆく。その間、戸外には春が訪れて  
お屋敷や村の家々の木々に雨を降らせ、新鮮な  
緑色に変えてゆく。夏は微笑みつつ、  
緑の森に立ち込める一若者は誓いを立てる。  
離れ離れの兄弟が再会する。美しい子供たちが  
華やぐ声をあげる。人は希望に微笑み、愛に満たされる。  
これが世の中！一小さな命にも喜びがあふれる、  
みずみずしい露が小道に降りるように一ただ一人、  
取り残された私一水のそばにしながら  
渇きで死にゆく、打ちひしがれた仔鹿のように。

## VIII

清らかな谷間からやってきたのか、  
可愛い花よ！優しい人が届けてくれた、囚人を慰めるために。  
檜の木陰で夏の夕立を受けて、雲雀の便りを  
聞いていたのか、うつむいた花よ。夕暮れの星が  
揺めくように、そよ風を、雨の雫を受けて  
震える花よ。天は梢の隙間からおまえを  
見つめていた、薄蒼い光をその熱く燃える心に  
届けて。蜜蜂も小川も、おまえにささやきかけていた—  
私の魂も熱い願いに満たされて、気が遠くなる、  
谷間にあるおまえの住処を夢見ながら—  
緑よ、自由よ、優しい響きに満ちた

谷間よーああ、そこから閉め出された私！

## IX

鳥がさえずりながら、独房の外を通り過ぎてゆくー

ああ、愛と自由よ！なんていとおしい！

丘の上に、小川のほとりに、農夫がおまえたちと

共に生きている。でも私は一私の中に気高く

他と交わらない王家の血が息づいて、

孤独にきらきらと流れている！ーその見返りが鎖とは！

王家！一心からの願いだった、王家のくびきから

逃れることが。その夢を見たばかりに

今私は、勝ち誇る彼らの凱旋車に、

虫けらのように踏み潰される！ーああ！天国は遠い、

無情な世の中よ！

あなたは私を忘れたの？シーモア！私は耐えてきた、

長い長い苦しみに！シーモア、愛しい人！

深い愛情が奇跡をもたらして、恋人を救出する

物語を聞いたことがあるでしょう？若者が歓喜の

涙を流し、大人も驚異の念に打たれる

語り部の物語を！ーあなたは、あなたは、

私の希望を朽ちるままにして、私を忘れてしまうの？ー

違うと言って！ー静かな夜に、今でも私は、

こんなにも祈り続けている、今でも、目覚めて真っ先に

あなたのために祈っているのに！ーああ！優しい友達よ！

この苦しみをどうやって最後まで耐え抜けというの？

救出！—まだなの、救出は？—野原が深紅の血で  
染まる前から、アベルの苦しむ声は天国の門に  
届いていた！—苦しみのあまり上げる  
叫び声は、雲をも突き抜けて神の御許に届く  
はずでしょう？ああ、聞いて、どうぞお願い！  
私の声を聞いて！この太陽の下、こんなに  
血を流し、傷ついて泣き、強い願いを  
抱く者があろうか！—どうか聞いて！—暗い心の叫びを—  
大海原で嵐に遭い、船上の人びとを心もろとも  
深海に葬り去る船、誰にも知られずに  
沈みゆく船から放たれる最後の叫びを、  
聞く者はいないのか？—伝える者はいないのか、  
船を飲み込み、一人残らず滅ぼす大波の脅威を！

あなたは私を捨てたのだ！私にはわかる、感じる、  
そうでなければ助けに来るはずだもの。  
楽しく戯れているのだ、酒宴の席で。  
葡萄酒が高々と掲げられ、なみなみと杯に注がれて、  
踊り子たちが群がっている！—私の心の  
魔法の鏡に映る影は、高貴な人びとの姿、  
あずまやで、邸宅でくつろぐ、華やかな人びとの姿。—  
中でもひととき立派な一つの影—  
それはあなた！—どうということ、美しい人びとに囲まれて、  
軽妙な会話を楽しみ、私の絶望をあざ笑うなんて！  
ひどすぎる！—私の愛は熱情に満ちた歌よりも激しく、  
深い思想でも語りきれなかった。  
それなのにそこであなたは笑っている、希望を失った私が、

この世から消えようとしているのに。

最後の緑の一片が、それでもあなたに取りすがっている—  
いいえ、やはり笑っていて！それでいい！あなたほどの  
輝かしい人に悲しみは似合わないから！

死！—なんてこと、死は炎の剣に守られた、鍵のかかった  
宝物だというの？秘められた泉、おとぎ話の果実なの？

私一人では、何の救済も得られないの？

こんなに苦しまねばならないなんて！

自由な翼を広げたい！—おお天よ！天よ！

この思考を止めて—押し寄せてくる—この心は深淵のようで  
恐ろしい、獐猛な生き物が蠢いている！せめて祈る力をください、  
この暗い一群が通り過ぎますように。

嵐は過ぎ去った。

天の父なる神よ！あなた、ただあなただけが、  
苦しみの中に浸わられた、恐ろしい心の深みを  
どこまでも探ることができる。

だから、お許してください、父よ！あなたの子が、  
心の闇に揺さぶられて我を忘れ、絶望のふちで  
罪を犯したとしても！希望が粉々に砕けたので、  
長い間この世に向けられてきた私の魂を、  
再びあなたのもとへ導いてください、  
あなたの代わりに人間を崇拜してしまった、  
哀れな愛する心を！あなたの強い腕に抱かれて、  
もう二度とつらい思いはしたくない！お許してください！  
どうか私に安らぎをください！

今、安らぎに包まれた

私の額にしるしが宿る、疲れきった人間に天から  
授かったしるしが。風はそよとも吹かないけれど、  
優しく私にささやいて、幾多の神秘を  
語りかける。

ほら、聞こえる！警告するような声が  
深まってくる—その言葉は、死！一人きりで、  
悲しい青春を過ごした私は今、過ちを悟り旅立つの、  
天を目指して。それでも、この女性の心を奮い立たせ、  
凄まじいほど暗いこの瞬間にも、初恋の人、あなたのために  
祈ります！—ああ！今でも優しい、真実の人よ！  
苦い泉の雫がほとばしるように、私の苦しみのせいで  
あなたに悪い評判が立ったとしても、  
人びとの心から忘れ去られますように。

今、消えゆく心に、  
始まったばかりの旅路についた魂に、  
最後の力をふりしぼって、思いを込めて、  
あなたのために祈ります！私が死んでも、  
あなたに平和が宿り、幾年にもわたり  
名声に恵まれますように！  
この祈りが私の死後も生き続け、その力を保ち、  
幾重にもあなたを祝福しますように！  
私のせいで暗い運命に巻き込まれたあなた、  
追放され、青春を無にして。もう十分です。  
この滅びゆく私の手から、自由を取り戻し、  
（あなたの夢を見つつ日々を過ごした女性のために  
涙を少しだけ流したら）、希望の道に戻ってください、  
あなたの幸せを見つけて！それでも、それでも、

静かな時間には思いを寄せて、愛しいお友達よ！  
声のない私の住処に！あなたの愛は、私にとって  
地上のどんな恵みよりも大切だった、  
その見返りが、流れくる熱い涙だったとしても！  
胸が苦しい、こんな無情な世に、こんなに  
大切なものを残して死んでゆくなんて！もしもあなたが  
優しい瞳で今、私を見つめてくれたとしても、  
それが何になるでしょう？  
ああ、苦しすぎる！—さよなら！もう一度、  
さよなら！—長年の情熱をこの言葉に  
込めて、送ります。あなたには聞こえない、—でも  
この声に込められた悲しみと熱い思いはいつの日か、  
あなたの心の聖所に届き、留まることでしょう。—  
死を超えて、私たちはきっと再び会えるはず—さよなら！